

慈雲

第 5 5 号

2020/10

真宗大谷派 慈雲山 瑞蓮寺

慈雲会

〒604-8214

京都市中京区新町通蛸薬師下る

百足屋町375番地

TEL/FAX (075)221-4616

zuirenji@hotmail.com

http://www.zuirenji.net/

Shinshū Ōtani-ha

Jiunzan Zuirenji

Jiunkai



十方淨妙
皆於中國
諸佛現土

十方諸仏（じつぽうしよぶつ）の淨妙（じようみやう）の国土、みな中において現ず。

【『觀經』の言葉】

時は紀元前四〇〇年ごろ、インドで実際に起きたいわゆる「王舎城の悲劇」で、苦しむ韋提希夫人に対してお釈迦さまが説法される場面の続きです。韋提希夫人は「もう苦しみや悩みの無い世界に生まれたい。どうかそのような世界をお説きください」とお釈迦さまに懇願しました。それに対してお釈迦さまは言葉でお説きなさらずにただ黙って眉間から光を放たれたのです。そしてその光が諸仏の国々を照らし摂してまたお釈迦さまの頂に戻ってきたのです。そこにできた台形はまるで須弥山のようにあり、その中に十方の諸仏の国々がすべて現れている、というのです。そのひとつひとつの諸仏の国はどれもすばらしいものであり、甲乙つけがたい理想の国々だったのです。（裏に觀經続く）

【『観経』の言葉】（表面）の学び

ここではおもて面の「十方諸仏の淨妙の国土、みな中において現ず。」とある経文をもう少し深く学んでいきましよう。そのすばらしい諸仏の国々とは例えばどのような国があるのでしょうか。経文の続きには「あるいは国土あり、七宝合成せり。また国土あり、もつばらこれ蓮華なり。また国土あり、自在天宮のごとし。また国土あり、玻璃鏡のごとし。十方の国土、みな中において現ず。」とあります。ここには四つの諸仏の国が代表して描かれています。七つの宝でできている国、もつばら蓮華からなる国、天界上位の神々の宮のような国、さらには閻魔様のもつ淨玻璃の鏡のようにきらきらと光り輝く国などです。続いて経文には「かくのごときらの無量の諸仏の国土あり。巖頭に於て觀（み）つべし。韋提希をして見せしめたもう。」とあります。これらのような国が無数にあり、それをひとつずつ巖（おごそ）かにはつきりと夫人に見せしめられたのです。夫人は「私はもうこれ以上苦しみや悩みの無い世界に行きたい、どうかそのよう

な国をご教示ください、とおつしやつたのでした。それに対してお釈迦さまは言葉で説明されずにこのような方法で夫人に「理想的な素晴らし国」をお見せになったのです。そのひとつひとつを見ていった夫人はどのように感じ、何を受け取っていったのでしょうか。言いかえたらどのような心の変化が夫人の中で起こったのでしょうか。ここでキサー・ゴータミーの話の思い出こします。この話は『ダンマパダアツタカタ』に載っている説話です。お釈迦さまのご在世時、キサー・ゴータミーという母親がいました。ようやく歩きかけたばかりの赤子を失い打ちひしがれます。彼女は子どもが死んだことが認められず治す薬を探してやがてお釈迦さまの元へたどり着きます。「お釈迦さま、この子を生き返らせる薬が欲しいのです」と、お釈迦さまは「わかりました。芥子（けし）の種をもらってきなさい。但しいまだかつて死人を出したことがない家からもらってくること」と言われました。夫人は希望に胸をふくらませて家々を回りました。しかしある家では親を失った、ある家では子に先立たれたといっ

たようにどこに行ってもいまだかつて死人を出した事のない家はありませんでした。キサー・ゴータミーははっと気がつきました。いまだかつて死人を出した事のない家はこの世のどこにもあり得ないということ。彼女はお釈迦さまの言葉の本心を知ったのです。その事を自分に知らしめようとしてあのように言われたのだと。本当に大切な事はみずから気づかせる、みずから選ばせるしかない、外から与えられるものでないという事をお釈迦さまは知っておられたのです。

お釈迦さまはキサー・ゴータミーを絶対的に信じ待つことが出来たのでしよう。いつか必ず真実に気づき目覚めることが出来るという事を。キサー・ゴータミーはお釈迦さまの本心を知ると共に子どもの死を受け入れ新たに歩みはじめるのでした。

『観経』では、お釈迦さまは韋提希夫人を絶対的に信じて諸仏の国を見せられたのです。そして待たれるのです。やがて夫人はお釈迦さまの本心を知りひとつの国を選び、立ち上がっていくのです。ここに師弟の健康的で芳しい関係があります。